

ドラマ

大庭みな子



ドラマ

庭みな子



作品社



大庭みな子（おおば・みなこ）
一九三〇年、東京・渋谷に生まれる。四五年、広島県西条市で学徒動員、広島市内で被爆者の救済を体験する。五三年、津田塾大学卒業。五九年より七〇年までの滞米中、六八年に「三匹の蟹」で群像新人賞・芥川賞受賞。七五年、『がらくた博物館』で女流文学賞、八二年『寂かなる』で谷崎潤一郎賞を受賞。主な著書に『ふなくい虫』『浦島草』『霧の旅』『舞へ舞へ蝸牛』『楊梅洞物語』などがある。

ドラマ

一九八五年三月二〇日 第一刷印刷
一九八五年三月二五日 第一刷発行

定価一四〇〇円

著者 大庭みな子

発行者 大村 勇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
二二〇二電話（〇三）二六二九七五三
振替口座（東京）六一二七一八三

本文印刷 シナノ印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

ドラマ
目次

ふなくい虫 7

かもめーわたしのチェホフー

81

かたちもなく寂し

163

あとがき

205

裝函 信太金昌

ドラマ

大庭みな子戯曲集

ふなくい虫

登場人物

阿理^{あり} ホテルの女主人

杲^{きょう} 花屋

料理長

穰^{じょう} 手品師

杳杳^{じょうじょう} 王太子

蘭蘭^{らんらん} 王太子妃

伯爵夫人

禿の紳士

糖尿病の紳士

肝臓病の女

葉巻の紳士

ホテルの客・数人

ホテルの従業員

第一幕

〈場所〉

国籍不明の観光地の島。舞台の正面の壁は一面に穴のあいた丸太を輪切りにして並べたもの。テーブルや台代りに同じく穴のあいた大きな丸太がならべられているが、阿理の居間という設定。何かの動物の毛皮か敷物代りに散らばっていて、登場人物は丸太や毛皮の上に坐ったり、寝そべったりしてよい。等身大の裸の人形がある。

裸の人形には蛇が巻きついており、また乳房や腹や膝に青や橙色の微の花が無数の小さなひとでのようにはりついている。その肌の上に満開の桐の花の梢を透かした色の照明がめまぐるしく回転しながらあてられる。波のゆれている海の中のような感じもする。舞台の一部に遠くに海が見える。

（阿理は裾の長い洋服を着ている。登場人物の化粧は奇怪、幻想的だが、美しく。

阿理は、立ち上って壁の穴に目をつけて何か覗く。どこかで水をばちやんとはねあげる音。

呉、キルティングのジャケットを着て、スーツケースを二つ持って登場。きよろきよろ部屋の中をみまわす）

果　へんな感じのする部屋ですね。なにか、ひどく寂しい――。

阿理　都会の家並みを高いビルの上から見おろすのってこんな感じじゃない？

果　え？

阿理　いえ、何でもないわ。ただ、ちょっとそんな気がただけ。お坐りなさい。

（果、床の毛皮の上に坐る）

果　どうも、――で、ぼくの仕事は？

阿理　説明します。――あなたの仕事は花屋ですからね、まず植物の手入れ。温室は見ましたか？

果　はい。

阿理　ジャケットを脱いだら？　まるでスキーに行くみたいじゃありませんか。もう雪はありませんよ。温水プールがあるから、水泳パンツのほうが似合うのに。

果　すみません。（ジャケットを脱ぐ）

阿理　ここは観葉植物と蘭で売っているホテルですからね、花の管理はホテルの重要な部門です。

温泉の熱を利用して熱帯植物を栽培していますから、その温泉のプールが温室になっています。す。だから、プールの管理もあなたの仕事です。下働きの人はパートで雇い入れています。そのことはあなたのやり方で、また相談します。客商売ですから、何よりもお客様を大切に。女客には気に入られたほうがいいけれど、男客がそばにいないときに、気に入られなさい。

果　はい。

阿理　今、あたしのそばに男客はいませんよ。

果 そうですね。

阿理 料理長と手品師とうまくやって下さい。花の他に料理と手品のショウで売っているホテルです。手品師にはショウの他にも仕事があります。あの人たちは、あたしの片腕です。あなたもそうなって下さい。

それから、あたしのこととは阿理さんと呼びなさい。

(果、ぎくりとする)

阿理 それぞれみんな名前を呼ぶことにしています。あなたの名前、何て読むの？　むずかしい字ね。

果 アキラです。日が木の上にあって、輝いているという意味です。コウとも読むらしいです。

阿理 へええ、あなたの御両親、学がある人なのね。

果 ぼくの母は碌に字も読めないような女でしたよ。父はまあ、少しは趣味があったのかもしれませんが、女遊びばかりして、そのうち不名誉な病気で廃人になって死んでしまいました。あなたの名前のアリはどう書くんです？

阿理 阿呆の阿に理屈の理ですよ。あなた、アキラかもしれないけど、木が日の下にあれば光がないんじゃない？　ところで、木の下に日を書いて、二つつづけた名前のお客さんがいるわよ。ヨウヨウという、糸でつるして上げたり下げたりするおもちゃみたいな名前の人。

その人、あなたと一緒に飛行機に乗って着いたはずよ。

果 ああ、あのきれいな女の人と一緒にだった——、どこかで見たような気がする。

阿理 あの人、どこかの国の王太子なんだそうよ。写真かなんかで見たんじゃない？ 王太子とい

ったって国から追い出されているらしいけどね。革命か何か起ったということよ。それとも、あなたが見たような気がすると言ったのは、女のほう？ 男には大抵の女はどこかで見たような気がするんじゃないの？ 母親とか、姉とか、妹とかに似ているような――。

果 はあ――。

阿理 払いのいいお客よ。大切にして下さい。

果 はい。

阿理 ああいう女、美人っていうの？

果 さあ、若い女の人は男にはみんなきれいに見えますよ。昔見た何かを思い出してきれいだと思ひこむんでしよう。

阿理 あの女、石女うすめよ、うまずめって石女いしめって書くのよ。

果 はあ。(少し考えて)――ぼくは不能です。

阿理 この頃、そういう人多いらしいわね、若いのに――。きつと、自分のことばかり考えすぎるのよ。そこに在るものを見て、自然にしていれば治るんじゃないかしら。この島じゃ、最近、子供が生まれたなんて話聞いたことないわよ。きつと、みんな不能の男と石女の女なんですよ、アリちゃん。(人形に呼びかける。果、ぎくりとする)

この人形、ダッチワイフに貸してあげましょうか？ あたしに似てる？

果 (裸の人形から眼をそらしながら) 生きているほうがいいですよ。

阿理 この人形、昔、知ってた人があたしそっくりに作ってくれたの。この人形を見ると、その

人のこと思ひ出すわ。見られてる感じが伝わってくるのよ。その見えない力があたしを動かすような気がする。

果 なるほど。

阿理 あたしがじっとあなたを見るとするでしょう。(笑う)体の底から力が起き上ってくるような気がする？——その人、彫刻家だったのよ。いつも抱いて寝てたわ。自分のつくった人形に恋したのよ。生きているあたしにじゃなくて。(阿理、人形を愛撫しながら、思わせぶりの笑い)

果 ぼくの部屋はどこなんでしょう？

阿理 (顔をしゃくって) そのドア。

(料理長、登場。果をじろりと見る。メニューを書いた紙切れを阿理に見せる)

阿理 何だって、あなたはこうやって毎日メニューを見せにくるの。どっちみち、あなたは決して自分の意見を変えないじゃないの。あたしがなにかひとことでも口を挟もうものなら、素人に何がわかる、みたいに嘲笑うだけじゃないの。

(料理長、裸の人形をじっと見る)

料理長 あなたの顔を見ただけですよ。それに、メニューを毎日見せるのは約束だったし。

阿理 わらびのソテーを入れたら？ 山鶏のつけ合わせに。

料理長 わさび入りのドレッシングで和えてみます、オードブルに。

阿理 ほーら、どっちみち、あたしの言うことなんて聞きやしないじゃないの。レモンとオリヴ

油を使うの？

料理長 いや、酒酢と、胡麻油を使います。

阿理 重すぎます。胡麻の匂いが欲しければ、きざんだ白胡麻をお使いなさい。あたしなら、レモンとオリヴ油と芥子の種子を使うのに。

料理長 かやの油と柚子でも使ってあげますよ。だけど、わらびはもう固すぎるよ。

阿理 多分、テーブルにはうどのサワークリーム和えかなんかがでてくるんだわ。あ、この人、今度、花のほうのことやって貰う人です。

（料理長、敵意のこもった眼で梶を見る。梶、頭を下げる）

阿理 穢にここへ来るように言つて。

（料理長、退場。阿理、壁の穴のところへ行つて覗く）

阿理 来てごらんなさい。（梶を招く。梶、穴に眼をあてる）何が見える？

梶 王太子じゃないですか、あの女と。

阿理 あの女、自分じゃ王太子妃のつもりよ。いかがわしい場所の踊り子だったのよ。あのお坊ちゃん、ほんとはあの女が怖いよ。あの女のたくましいからだやぎらぎらした眼や、飢えた魂が自分を生き返らせるような錯覚を起すんじゃないかしら。遠い祖先の記憶って、ああいうことを言うのかしら。怖いものに必死になって毒を飲ませて安心しようとしているらしいわよ。

梶 飛行機の中でセーブルのコートを着ていたときは結構貴婦人に見えましたよ、サディスティ